

「私たちの罪のための主の十字架」

ルカ23：32—47

堀田修一 24・3・24

今週は、受難週です。本日の説教で私たちの罪のために十字架で死なれた主の御姿を見つめましょう。

I 「彼らをお赦してください」と祈られる主

1. 「ほかにも二人の犯罪人がイエスとともに死刑にされるために引かれて行った。『どくろ』と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。そのとき、イエスはこう言われた。『父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているかが分かっていないのです。』彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた」：32—34。罪が何一つない主は不当な裁判で夜通し引き回され、むち打たれ、辱めを受け、十字架によってなされる処刑は、肉を裂かれる激痛と共に、太陽の照り付けによるのどの渇き、出血により全身のいのちの力が奪われる苦しみ、さらに呼吸困難という言いようもない苦しみを伴うものでした。罪人の私たちが、自分の罪への刑罰として私たち自ら受けるべき苦しみを主は、身代わりに受け尽くして下さいなのです。
2. 私たちにとって、自分自身が極限の苦しみの中にあるときに、他の人のために祈ることは、簡単な事ではありません。「私（自分）の苦しみを和らげてください」と自分のために祈るのが精いっぱいかもしれない。しかし、何の罪のない主は、世界最大の不当な苦しみを受けながらも、自分を殺そうとする人々のために「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」と祈られたのです。主イエスは、旧約聖書が指示していた本物の大祭司として、とりなしの祈りをされたのです。その当時の人々のためにだけではなく、今日に至るまで主を退けようという思いを持っている人々（私たちを含む）のためにとりなしの祈りをされたのです。「彼らは自分が何をしているのかが分かっていないのです」とは、彼ら（人間）が、主イエスが神の御子（神ご自身、ヤハウエ）であり、真の約束の救い主、メシヤであることを知らないだけではなく、主を殺す、退けるという重大な罪を犯していることを知らずにいる無知を示す。私を含めて、世界一素晴らしい主を信じようとしなければ、主を退けるという最大の罪を犯しているのです。
3. 主の「父よ、彼らをお赦してください」とのとりなしの祈りは、神の正しいさばきが直ちに下らないように、また、彼らが自分たちの罪に目覚め、罪を悔い改めて主イエスを救い主と信じる機会が与えられるようにという祈りです。この祈りが聞かれていることは、それから約五十日後に下られたご聖霊が、弟子たちに主の死と復活の意味を大胆に語らせ、幾千人という人々が自分たちの罪を認めイエス様を主、救い主として信じ（使徒2章）、さらに祭司たちさえも信仰に入った（使徒6：7）ことを見れば分かります。また、主の十字架の上での「彼らの罪を赦してください」とのとりなしの祈りは、信じようとしなければこれまでの時代の人々（私たちを含む）のためのとりなしでもあります。主の十字架の事実から、現在、約2,000年間、自分の罪を認め、主を信じ救われ、罪を赦され、永遠のいのちをいただいているクリスチャンが現在、世界中に約24億人いる事実（世界の30%）は、主の十字架での「父よ、彼らの罪を赦してください」とのとりなしの祈りの答えです。BC（Before・Christ。キリ

スト以前。紀元前) 740-690年ごろまで活動したイザヤ(ヘブル語で「ヤハウエの救い」の意)の預言が本日朗読された箇所にある→「彼は多くの人の罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする」(イザヤ53:12)。「イエスは、いつでも生きていて、彼ら(私たちのためにも)のためにとりなしをしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を完全に救うことができになります」(ヘブル7:25)。

- Ⅱ 十字架の主を見つめる人々の反応。私たちが、そこにいたなら、どう反応したか深く考えたい。
1. 十字架の主を見つめる人々の反応で、一つの共通したことばがあることに深く心を止めたい。
「民衆は立って眺めていた。議員たち(ユダヤの指導者たち)もあざ笑って言った。『あれは他人を救った。もし神の子キリ

スト(メシヤ、救い主)で、選ばれた者なら、自分を救ったらよい』:35。「兵士たちも近くに来て、酸いぶどう酒を差し出し、『おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ』と言ってイエスを嘲った」:36-37。共通のことばは、「自分を救ってみろ」である。「自分を救ってみろ」という嘲りは、実は自分たちこそ救いを必要としていることを認めたくない罪の姿を映し出している。主は、私たち人間の罪を贖うために人間になられたが、神でもあられた。それ故、ご自分の神としての力を発揮して、十字架から降りて「ご自分を救い」、皆を「あっと」言わせることは、簡単だったのです。しかし、もし、そうされて、世的な英雄になられたなら、ローマの圧政からの解放者、メシヤ、救い主になられても、私たち人間の心の罪を赦し、永遠のいのちを与え、主の再臨の時に栄光の体を与える真の救い主になれることはできなかったのです。もし主が、十字架の上で「自分を救われていたら」私たちの救いは永遠になかったのです。主は、どこまでも世的な栄光ではなく、御父のみこころに従う(私たち人間のために十字架で死ぬ)ことを選び通されたのです。※私たちなら何を選んだでしょう?世の栄光か、嘲られても、真に正しい道、神のみこころを選ぶか?この受難週に「自分ならどうしたか」と問いつつ歩むことは意義のある事です。

2. 主を真ん中にして両側に十字架につけられていた二人の犯罪人の反応の違い。「①十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、『おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え』と言った。すると、②もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」:39-41。このもう一人のことばの深さ、理解は、どこから与えられたのだろうか。彼も初めは他の人といっしょになって主をののしっていた(マタイ27:44)。しかし、ある時点で、主イエスが罪のない本物の救い主と悟ったのです。彼は、十字架の主の「父よ、彼らをお赦しください」との復讐されない愛と真実な祈りをそばで聞き、十字架での主の態度、神に委ね切った姿を見ているうちに変えられたのです!それから彼は、十字架上で、そばで十字架につけられている主にお願いするのです。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください」(:42)と。この願いは、「御国が確立される時、私を覚えてくださり、御国に入れてください(私をお救い下さい)」の意。その願いに対する主のおことば=「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイス(天国)にいます」:43。主のお答えは、「世の終わりに御国が確立するときではなく、わたし(主)を信じるあなたは、今日、

あなたの肉体が十字架刑で死んでも、あなたの魂は、今日、わたしとともにパラダイス(天国)にいます」です。このみことばは、大きな励ましです。生涯のある時に主を信じる人は、地上で死を迎えるときに、確実に魂は天国に行き、主と共にいて永遠の愛で主に愛され主を礼拝できるのです。十字架の主を信じる人と信じない人がいる事実が犯罪人の応答でも分かる。

Ⅲ 主の恵みへの応答

1. 主を信じ主の十字架の愛の赦しで自分の罪(憎しみ、恨み、復讐心、偽り、汚れ)をまず主に赦された私たちは、私たちが赦しにくい人々を主の愛で心から赦せるように祈り続けましょう。人を赦すと私たち自身の心も軽くなり癒やされ平安で満たされます。相手への心の距離も近くなります。※証し。
2. 今週の受難週に主のお苦しみと主の愛と赦しの恵みを思い、感謝して歩みましょう。そして、まだ主の救いを信じていない人々を主の愛で愛し、人々の救いのために祈り続けましょう。賛美の応答 118